

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 宮城県仙台二華中学校・高等学校 (※正式名称を記載)

種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}

中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校

教員養成大学 専修学校、各種学校

特別支援学校

その他 (例：小中高一貫)

※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒984-0052

仙台市若林区連坊1-4-1

E-mail chief@nika.myswan.ne.jp (代表)

Website http://www.nika.myswan.ne.jp/index.html

生徒数 中学校 男子 153 名 女子 161 名 合計 314 名

高校 男子 224 名 女子 487 名 合計 711 名

全体合計 1025 名

生徒の年齢 13歳～18歳

2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

※報告書提出時点～平成30年3月末までの活動は、予定(見込み)として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800字程度+活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項1-1、2-1に対応

当校は、「進取創造」「至誠貢献」という校訓に基づき、「地域・日本・世界に貢献できるグローバルリーダーの育成」を目指している。これに関し、ESDを現代社会に生きる地球市民としての資質育成にとって重要な教育活動として捉え、ESDの実践を通してSGH事業と関連しながら「適切な世界観」「本質を見抜く力」「相対化する力」「共感する力」「構想力」の5つの力の育成を目標とした。

具体的には年間を通して、①環境学習、②課題解決、③国際理解学習の3点を中軸とした学習活動を展開した。

① 環境学習に係わる活動

中学：中学校1年生では、通年3回の野外巡検(定点観測)を通じて、四季の移ろいによる植生の変化や生命の多様性を感じ取らせ、それらを具体的にデータ化し、実証的かつ科学的に問題を捉えさせる取組を行っている。また、中学校2年生は、北上川下流に行き、ヨシの植樹を行い、ヨシ原の再生活動に参加すると共に、震災や防災に関する理解を深める活動を行っている。

高校：高校1年生は週3時間「課題研究」という時間があり、そこで水問題や環境問題についての書籍を読み、「ブックレビュー」に取り組ませている。そして、それを先行研究のベースとして、それぞれ関心のあるテーマを設定し、調べ学習を行い、論文執筆に取り組んでいる。また、体験的な活動として、10月末に1泊2日で全員「北上川フィールドワーク」に出かけ、鉱山の汚染にあった地域の学習や防災施設の見学、また植林活動を通して、環境について体験的に学んでいる。高校2年生は個人ないし少人数のグループで「課題研究」に取り組み、主にアジア地域の水問題について、興味関心に基づいてテーマを設定し、研究活動を展開している。11月下旬には4泊5日の海外フィールドワーク（シンガポール・マレーシア）に出かけ水関連施設を訪問し、広く環境問題について学習している。

② 課題解決に係わる学習

中学：中学校3年生では、今まで学習したことを基に自分でテーマを設定し、仮説を立て、実験・観察を行い、ポスターセッション形式にまとめて発表するという活動を行っている。ポスターセッションは、同級生以外に保護者や下級生、大学の教授にも参加してもらい、成果を共有している。

高校：高校1年生、2年生は全員「課題研究」に取り組む。本校教員や外部講師による講演から関心のある分野や問題意識を発掘し、テーマを設定する。その後は、文献やインターネットによって情報を収集しながら、調べ学習を進める。また、高校2年生では生きたデータを入手するために全員に現地調査に取り組みさせており、海外研修先であるシンガポール・マレーシアでインタビューやアンケートを行い、それを帰国後の学習活動に反映するよう指導している。年度末にはポスター発表をさせ、気づきを発信すると共に、全体で共有するようにしている。

③ 国際理解に係わる学習

中学：中学校2年生では、英語での会話やコミュニケーションをとる際のマナーやルールを身に付けたり、外国人との直接交流体験を通して、異文化への理解を深めたりすることを目標として、2泊3日で英語のみを用いて過ごす「イングリッシュキャンプ」を実施している。また中学校3年間を通し、相互交流先のシンガポールや海外からの訪問団との交流の機会があり、国際理解を深めている。「総合学習」の時間には、国際理解ワークショップも実施している。

高校：教育課程に定位している活動としては、高校2年で実施する全員参加の「海外研修旅行」（シンガポール・マレーシア）がある。この研修旅行では単に観光にとどまらず、家庭訪問をしたり研究のテーマを持って地元の人々にインタビューをしたり、異文化理解や多文化共生についての理解を深めるとともに、共生する姿勢や異文化尊重の態度を身につける機会としている。また、高校1、2年の希望者（20名）は、12日間アメリカ・デラウェア州の高校でホームステイをしながら現地の高校に通う短期留学をする。ここで異文化を体験するとともに自国文化を相対化・客観視することになる。日本文化について英語で発信するプレゼンにも取り組ませている。さらに、高校2年生の希望者10名程度は、メコン側フィールドワーク（タイ・ベトナム・カンボジア）に出かけるチャンスもある。現地のニーズを調査し、研究し、実際にアクションをする能動的な学びの場となっている。



① 中学校 2年生北上川FW ヨシの植樹



①中学校 1年生SR泉が岳巡検 木の学習



② 中学校 3年生SRポスターセッション



③中学校 2年生イングリッシュキャンプ



①高校 1年生北上川FWでの植樹



③高校 2年生マレーシアの伝統工芸に触れる活動

(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野 (複数選択可)

■ 1. 環境	□ 2. エネルギー	■ 3. 防災	■ 4. 生物多様性
□ 5. 気候変動	■ 6. 国際理解、文化多様性	■ 7. 地域の伝統文化、文化遺産	■ 8. 人権・平和
□ 9. 健康・福祉	■ 10. 食育	□ 11. 持続可能な生産と消費	■ 12. 貧困
□ 13. エコパーク	□ 14. ジオパーク	■ 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
□16.ジェンダー平等	■ 17. その他 (世界の水問題)		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input checked="" type="checkbox"/> 8. その他 (適切な世界観 洞察力 共感する力 相対化する力 課題解決力)	

ウ. 活動時間（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input checked="" type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input checked="" type="checkbox"/> 5. その他(自由記述: 海外研修旅行、学校行事)	

エ. 使用した教材（書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名）

・教育協力NGOネットワーク「世界一大きな授業」に関する資料・ホームページ <<http://www.jnne.org/gce/>>

・『学びの技』後藤芳文・伊藤史織・登本洋子著、玉川大学出版部（2014年）

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項1-2, 1-3に対応

中学：週2単位の「総合的な学習の時間」を柱として、教科横断的な指導計画を立案・実施している。例えば、国語の時間で養った発表の仕方や批評の仕方、まとめ方を基に、「総合」の発表に生かしたり、「総合」の時間で学んだ世界の諸問題を基に、社会科の授業で模擬国連を行ったりという活動を行っている。また、各教科や特別な教科道徳の授業においては、生徒たちの自主的な活動を重んじ、アクティブラーニングの手法を取り入れた実践を多く行っている。昨年度より、生徒会活動においては、書き損じはがきの回収やユニセフ募金の呼びかけに力を入れたり、地域活動への参加をし始めたりと、活動の幅を広げつつあり、高校と連携しながら多岐にわたった活動を展開し始めている。

高校：「総合的な学習の時間」を「課題研究」として学校設定科目として教育課程に組み入れ、高校1年生は週3単位、高校2年生は1単位ないし2単位（いずれかを選択）で、地域および世界の水問題解決への取り組みについて年間を通して総合的な探究学習を行っている。複数の教員で指導に当たり、ポスター発表や論文、ポートフォリオ等で多面的に評価している。また、高校1年生は1泊2日で全員「北上川フィールドワーク」に出かけ、防災や環境について体験的に学んでいる。高校2年生は全員4泊5日の海外フィールドワーク（シンガポール・マレーシア）に出かけ、異文化理解や多文化共生、水問題等について学習している。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。(200字程度)

※チェック事項1-4に対応

ユネスコスクールの活動を盛り込んだ年間カレンダーを中学1年から高校2年まで作成し、年度初めの職員会議で共有している。また、各教科・科目のシラバスにも徐々に反映させていこうと関係部署で動き出している。

職員の共通意識を持つことが最も大事であると考え、文化祭や生徒会の担当者とも情報共有しながら、活動を広げようとしている。また、保健・衛生の面から、養護教諭との協力体制も重要視している。

併設型中高一貫校であるため、中学・高校との連携をいっそう強化していくことが課題である。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価(内部/外部)の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。(200字程度)

※チェック事項1-5に対応

内部については、ユネスコスクール活動を包括する校務分掌「研究企画部」の反省会資料に、その年の活動や運営について振り返る項目を設け、部内の教員で成果と課題について議論し、共有し、記録として残すようにしている。また、職員全体で共有・確認すべき事項については、全職員への配布資料にも掲載し、全体会の場で確認している。

ユネスコスクール活動に限定した外部評価は現在のところ行っていないが、学校評価あるいはグローバル教育の評価は行っている。ユネスコスクール活動の外部評価については、今後検討していく必要があると認識している。

- ⑤ ESDの推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度)

※チェック事項2-2に対応

7月には第73回 日本ユネスコ運動全国大会 in 仙台において、本校生徒がパネリストとして参加し、活動について生徒の視点から紹介し、全国に向け発表した。

12月には、宮城県教育委員会が所管する教員組織「宮城県高等学校国際教育研究会」が主催する「国際教育研究大会(教員研修会)」において、本校のユネスコスクール活動について、代表生徒1名と担当教員が協同で発表し、県内の教員と地域の関係機関(JICAや仙台国際センター)に発信した。質問が出るなど関心を示す良い反応があり、実施後のアンケートでは生徒側の学び、そして運営側の体系的な教育活動両面から、ユネスコスクールの活動がよくわかった、と好評であった。

また、こうした活動はJICA東北や「宮城県高等学校国際教育研究会」とも共有化を図っており、会報等にしばしば紹介している。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成（地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など）
（200字程度）

※チェック事項 2-3 に対応

東北のESD推進拠点となっている宮城教育大学と連携し、アジアやアフリカの教育関係者や視察団を本校で受け入れ、本校のグローバルな取り組みやESD・国際理解に関する教育活動について見てもらい、教育内容についてディスカッションする機会を得ている。

また、ユネスコスクール担当教員は、JICA東北や仙台国際センターと良好な関係性を構築し、連携し合いながら教育活動を進めている。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成（200字程度）

※チェック事項 2-4 に対応

県内のユネスコスクールとの交流が始まりつつある。少なくとも仙台二華高校と富谷高校の担当教員は連携を深め、常に最新の情報や実施した活動等を共有し合い、高め合っている。今後県内のユネスコスクールとの交流を活発化させ、協同でイベント等を開催したいという構想を持っている。

国外のユネスコスクールとは現在のところ、交流がない。しかし、今後は交流したいという希望を持っている。特にアジアのユネスコスクールと交流を始めたいと考えている。交流可能な学校の情報を求めている。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）

※チェック事項 2-5 に対応

中高一貫教育校でありながら、これまでは高校が活動の中心であり、中学校側の意識が低い傾向にあった。しかし、高校の担当教員が積極的に中学校の教員側に働きかけをおこなってきたことにより、中学校教員の意識の向上がみられている。例えば、ユネスコ寺子屋運動（書き損じはがきの回収）やユニセフ募金等、中学校側が積極的に協力してくれるようになった。

「県立」の中学校であることから通学範囲が広範囲にわたり、「地元根付いた中学校」という意識や取り組みが希薄である。その点について、ESDの理念に基づき、地域への社会貢献を行っていくことで、ユネスコスクールとして地域や保護者に認められる努力をしていく必要を感じている。

災害が発生した時等、なんらかのアクションをしよう、という気概や意識が生徒たちに広がってきていることは、生徒側のポジティブな変化として感じている。また、夏季休業中等には、海外渡航に意欲を示す生徒が年々増加している。

(3) 平成 30 年度の活動計画 (200~400 字程度)

平成 30 年度についても、これまで同様、中学校においては、「総合的な学習の時間」における①環境学習（巡検、植生研究、水問題学習等）、②課題解決学習（課題研究、ポスター発表等）、③国際理解学習（国際交流、イングリッシュキャンプ、海外研修旅行、「世界がもし 100 人の村だったら」「貿易ゲーム」「国連弁当」等の国際理解ワークショップ等）の 3 本柱で、教育課程にのなかで体系的・教科横断的に進めていく。さらに、地域への貢献を強化し、高校とも連携して募金活動等も積極的に展開していく。

高校においては、全員が必修となる「課題研究」を通して、①環境学習（北上川フィールドワーク、メコン側フィールドワーク、世界の水問題学習等）、②課題解決学習（課題研究における調査研究、海外研修旅行での調査、ポスター発表、論文執筆等）、③国際理解学習（海外交流校との交流、海外訪日団との交流、海外研修旅行先での異文化理解等）の 3 本柱で、教育課程の中で年間を通して教育活動を展開していく。また、「評価」については、生徒の学びの軌跡を把握し、自己アセスメントできるよう支援していく。

中学・高校合同で、文化祭におけるチャリティー活動、災害時における募金活動、また地域への貢献活動を、関係機関と協力しながら、さらに充実させていきたい。